

## 【ケーススタディーの使い方】

第二部では、主にジュニア指導で起きがちな 23 のケースを取り上げ、それぞれについてパワハラチェック表による評価とともに、不適切と思われる内容やポイントの解説に加えて、【**グッドコーチになるために**】の部分では、グッドコーチを目指すうえでのアドバイスを紹介しています。

指導現場における暴力やハラスメントなどの不適切な行為の中には、スポーツ指導者にすれば、あくまでコーチングの一環であり、よかれと思ってやっていたことであり、それをプレーヤーや保護者などから「不適切である」と指摘され、戸惑うことがあるかもしれません。そこで、自分の考え方・コーチングを見つめなおすツールとして、以下のように活用し、グッドコーチングの実践に役立てることをおすすめします。

- 1) P.14 のパワハラチェック表(未記入)を転記した用紙を準備します。
- 2) まずはケースを読んで、自分に置き換えて考えてみましょう。ケースと似た言動はなかったか、あるいはそのケースについてどう思ったかでもかまいません。
- 3) 次に、パワハラチェック表に自分なりの評価をしたうえで本書の評価と比較・検討します。あわせて、解説文を読み、ケースのどの言動が不適切な行為にあたるのかを理解しましょう。自分では単にコーチングの一環とっていた言動が、不適切な行為に該当することもあります。この機会に、自分のコーチングを客観的に振り返ってみましょう。
- 4) 最後に、【**グッドコーチになるために**】を読んで、いかなる暴力やハラスメントも行使・容認しないコーチングをするために、自分にとっての課題は何かを考えます。そのうえで、その課題をクリアするための具体的な方法や、その方法の学び方を考えて実践してみましょう。
- 5) 研修の場などで、複数の指導者や保護者など多くの関係者とともにもグループワーク形式(主体的・対話的な方法)で考え、学習すると、より深い学びが得られて効果的です。

CASE

01

## 練習中の不適切なプレーを注意しなかった



小学生のクラブチームのコーチのAさんはある日、3年生以下のプレーヤーによるゲーム形式のトレーニングを行いました。二手に分かれて試合をする子どもたちのプレーを見ていたとき、Aさんの目に、あるプレーヤーが相手に抜かれそうになった拍子に、その子のユニフォームをつかんで引っ張る行為が映りました。

「あっ、ファウル」と思ったのですが、つかまれたプレーヤーはその手を振りほどいて、何事もなかったようにプレーを続けたため、「まあ、いいか」と特に注意を与えずにスルーしました。実際の試合では、ファウルをしてでも相手を止める必要がある、と思っているからです。

チームでは、抜かれそうなときにはユニフォームを引っ張るプレーヤーが増え、引っ張られた拍子に転んでしまうプレーヤーもいましたが、Aさんは注意をしませんでした。その後の練習試合では、これまで勝てなかったチームにも勝つことができたことから、Aさんはトレーニングの成果が出たと感じました。



CASE  
01

## 練習中の不適切なプレーを 注意しなかった

パワハラチェック表	評価
①暴行・傷害・脅迫・名誉毀損など刑法に触れるような言動をしていませんか	×
②人格否定や体罰など人間としての尊厳を侵害する言動をしていませんか	×
③地位や立場など人間関係の優位性が背景にありますか	○
④指導や教育の適正な範囲を超えていますか	○
⑤複数回または執拗ではありませんか	○
⑥相手に身体的・精神的苦痛を与えていますか	△
⑦周りのプレーヤーが萎縮するなど、活動環境を悪化させていませんか	△
合計	4.0 レベルⅢ

本ケースのように黙って反則を見過ごしてしまうことは、子どもたちに「勝つためには、少々ルール違反をしてもいいのだ」という誤ったメッセージを与える危険性があり、また、反則によって本人および相手のプレーヤーに危害が及ぶ可能性もあります。

指導者は、プレーヤーに対して監督義務・安全配慮義務を負っており、他のプレーヤーに危害を加えないように、日ごろから注意を払って指導・教育を行う必要があります。

### グッドコーチになるために

小学生などのジュニア期は、ルールの基本を学ばせる時期です。年齢的にもまだまだルールを理解できていないプレーヤーが少なくありません。ゲーム形式のトレーニング中にこうした反則が起きがちですが、指導者は反則を目にしたら、すぐに反則であることを指摘し適切に指導しましょう。

その際、グッドコーチは、単にルールを守るよう伝えるだけでなく、なぜスポーツにルールが必要なのか、なぜそのようなルールがあるのかについて、プレーヤー自身に考えさせるとよいでしょう。ルールを守ってこそ、プレーヤー自身が、また対戦相手が安全にプレーできることに気づいてくれるかもしれません。このような体験を通じて、プレーヤーはフェアプレーやリスペクトの精神を学んでいくことができます。スポーツの価値を次世代に伝えていくのも、グッドコーチの大事な役割です。

CASE

13

## 部活動の休養日なのに、 こっそり練習



外部コーチとして中学校運動部を指導しているMさんは、「練習時間が足りない」と内心焦っていました。重要な大会の試合が近づいているにもかかわらず、チームプレーの精度や個人のスキルがまだまだ目標レベルに達していないからで、成績によってはコーチである自分の手腕を問われかねません。

「どこか練習ができる日はないだろうか」とカレンダーに目をやり、日曜日なら、部員たちは授業が休みだし、自分も時間が取れます。ただし、ネックなのはその日が部活動の休養日になっていることです。

「正式な練習ではなく、自主練習ということにすれば問題ないだろう」

Mさんはそう判断し、「日曜日に大会に向けた自主練習を市の体育館を借りて行うから、練習したい人は参加するように」と連絡網を通じて部員たちに伝えました。自主練習のため、学校には特に許可を取らないまま、部員を集めて夕方までたっぷり練習をしたのでした。

CASE  
13部活動の休養日なのに、  
こっそり練習

パワハラチェック表	評価
①暴行・傷害・脅迫・名誉毀損など刑法に触れるような言動をしていませんか	×
②人格否定や体罰など人間としての尊厳を侵害する言動をしていませんか	×
③地位や立場など人間関係の優位性が背景にありますか	○
④指導や教育の適正な範囲を超えていますか	○
⑤複数回または執拗ではありませんか	×
⑥相手に身体的・精神的苦痛を与えていますか	△
⑦周りのプレーヤーが萎縮するなど、活動環境を悪化させていませんか	△
合計	3.0 レベルⅡ

スポーツ庁の「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」では、スポーツ医・科学の見地から、週当たり2日以上休養日を設けることが望ましいとされています。休養日に練習することは、明らかなパワハラとは言えないまでも、プレーヤーの心身に悪影響を及ぼす可能性があり、不適切であると言われても仕方ないでしょう。また、「自主練習」という名目で学校に無届けで練習するのも、万一ケガや事故が起きた場合、対策や補償をどうするのか、誰が責任を負うのかなど、さまざまな問題が生じます。

## グッドコーチになるために

1日でも多く練習をして試合に備えたい、と思う指導者もいるでしょう。しかし、長時間練習が体力や運動能力、競技力の向上につながるわけではありません。中学生の部活動はあくまで教育の一環であり、社会性・公共性を身につけてもらうための学びの場でもあることを認識すべきです。定められたルールの趣旨をよく理解したうえで、それに則って活動することが大切です。また、トレーニング効果を得るには適切な休養が必要で、過度な練習はスポーツ外傷・障がいやバーンアウト（燃えつき）などのリスクを高めるおそれがあります。休養もトレーニングの一環である点を、生徒本人や保護者に理解してもらうこともグッドコーチの大切な役割です。

この機会に、プレーヤーが主体的に取り組む自主練習とはどうあるべきか、自身の考えを深めてみてはいかがでしょうか。

CASE

17

## 他の部員の前で 「外国人だからわからないよ」



ある高校の運動部に、外国人留学生がやってきました。「これでチームのレベルは上がるにちがいない」と、顧問のQさんは、長い間破れなかったベスト8の壁も、留学生の加入で突破できるかもしれないと大きな期待を寄せました。

ところが、チームの一員として練習に加えてみると、確かに運動能力は優れているのですが、日本語がほとんど通じないため、関係プレーなどの指示がきちんと伝わりません。このままではかえってチームにとってマイナスになりかねず、「どう指導すればよいのか」と困りはてたQさんは、ほかの部員に思わずこぼしました。

「あいつは日本語が通じないから、指示してもダメだよなあ」

その留学生も、自分についてマイナスのことを言われているのを雰囲気察して、困惑しています。

Qさんは十分に理解させることを半ば諦め、それ以上の指示をしないまま練習を続けさせたのでした。

CASE  
17他の部員の前で  
「外国人だからわからないよ」

パワハラチェック表	評価
①暴行・傷害・脅迫・名誉毀損など刑法に触れるような言動をしていませんか	×
②人格否定や体罰など人間としての尊厳を侵害する言動をしていませんか	○
③地位や立場など人間関係の優位性が背景にありますか	○
④指導や教育の適正な範囲を超えていませんか	○
⑤複数回または執拗ではありませんか	△
⑥相手に身体的・精神的苦痛を与えていませんか	○
⑦周りのプレーヤーが萎縮するなど、活動環境を悪化させていませんか	△
合計	5.0 レベルⅢ

言葉が通じないから指示をしてもムダだと決めつけて、外国人留学生の指導をやめてしまうのは、人格権の侵害であり、問題のある要求ということになります。国籍や言葉の違いはもちろん、宗教や生活文化、家庭環境など多様なバックボーンを持ったプレーヤーとの共存が求められる時代となっています。それらの違いで差別をしたり、決めつけたりすることのないような、誰も排除しない雰囲気づくりや環境を構築することが、指導者としての重要な役割となっています。

## グッドコーチになるために

グッドコーチは、多様性を大切にしなければいけません。宗教、生活文化、言葉の問題など、本人の置かれている状況を勘案しながら長い目で見ていきましょう。言葉が通じずとも、動画や作戦ボードを使用する、ほかの部員にやらせてみせるなど、言葉の障壁を乗り越えて意思疎通をはかる方法はいくらかでもあります。多様性は、学びの機会を提供します。チームに迎え入れた以上、指導者は部員に宗教や文化などの双方の違いを説明して情報を共有し、チームでサポートしていくことが大切です。

敬意を持って接し、互いの長所を認めながら、刺激しあういい関係を築いていきましょう。そうすれば寛容や謙虚さなど、プレーヤーは互いに多くを学ぶことができるでしょう。日本人プレーヤーも海外に出ることがあります。グローバル化時代にふさわしい経験になると期待できます。